

【要約】

平成 25 年度名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士）申請論文

有島武郎の思想とその系譜

杉淵 洋一

本博士論文「有島武郎の思想とその系譜」では、第一部「【フランス語版】有島武郎『或る女（前編）』フラマリオン(1926)をめぐって」において 1926 年にパリで出版されたフランス語版『或る女』*Cette femme-là* の出版経緯を探っていくことから、翻訳者（好富正臣、アルベール・メーボン）、ないしは翻訳者の周辺人物たちがコミットしていた日本とフランスを結ぶ共同体（集団）の姿を浮かび上がらせ、それらの共同体と、『或る女』のオリジナル・テキストの作者である有島武郎との物理的、精神的距離についての分析を主として行った。

続く第二部「有島武郎が形成した共同体」では、第一部での分析された共同体において活動していた人物たちに、作者・有島武郎の側から迫っていくことを企図し、有島が創出していた共同体、同様に有島の恩師や友人たちが形成していた共同体の姿を描き出し、集団内における人脈のつながりによって生み出される効果、結果などについて、関係者間の影響関係から考察を加え、有島が織りなした共同体に一定の方向性を与えることに心掛けた。

有島の視線からの共同体や参加者たちの言動、参加者たちの有島や共同体を見る視線を双方向的に精査することによって、組織における有島の機能と役割をできるだけ（時間、空間、人物関係において）立体的に浮かび上がらせようとした。

師弟関係が日本とヨーロッパにまたがった石川三四郎とその師であるエドガー・カーペンターやルクリュ一家における思想、主義の継承にも頁を割いて、外来の思想の直接的な受容と間接的な受容の違いにも目を配った。

第三部「思想の伝達の系譜—父から子へ—」では、「世代（父と子）による違い」という概念を念頭において、親子間における思想や主義といったものの伝承、伝達性の有無、また、有りえた際には、時代や場所、人間の違いによる特質性にフォーカスを当てた。

よって、有島武郎については、父・武との関係について詳しく分析を加えた。また、有島における「世代」の問題をより明瞭に浮かび上がらせるために、有島と比較的近い

場所において、その社会的地位から、親子関係において有島と類似した問題を抱えていたと判断される鶴見祐輔とその子・俊輔のケースにも配慮ついても分析を施した。

本博士論文において執筆者が一貫して提起を企図したものは、1926年のパリにおける『或る女』の出版の理由は、翻訳者の単なる興味本位による出版であったのではなく、既に有島は亡きものとなっていたが、有島の思想なり人脈なりが他者に伝わった結果であり、その物質的な到達点の一つ（出版という形）としてなされたということである。また、この出版に至る過程には、様々な有島をめぐる（時には有島の友人や教え子たちであったり、時には有島の熱狂的な読者たちであった）これまでは言述されることがあまりなかった複数の集団（共同体）の介在があったということである。執筆者は本論文において、これらの集団の実体を僅かばかりでも描きたかったのである。

近年、有島武郎といえば「白樺派」の一作家として安直に扱われる傾向が顕著になっている。確かに、有島における白樺派のメンバーとの関係性、共通点、相違点などをめぐった検証作業も、グループ内の西洋芸術、文学（文化）、思想の受容の様相を顕在化させるためには、たいへん重要な作業であり、研究が重ねられなければならない領域ではあるだろう。

しかし、そこに過度なこだわりを持つことは、もっと大きな有島のイメージ、つまり政治、外交、経済、医学などといった側面も含め、大正時代中期以降の日本を牽引した人々に示唆を与えた有島のイメージのごく一部分だけを切り取ることになり、殊更に有島のディレッタントな文化人（知識人）としてのイメージを強調することになりはしないか。有島という人間の本質的なところを見のがしている気がしてならない。

単に文学者の一人としてではなく、国際化する当時の日本の中で近代化の一翼を担った、そうでなければ、日本の近代化を担った人々の象徴となって示唆を与えた稀有な人物として、日本の近代史の中に有島武郎の再配置を試みることに、これまで語られてきた有島のイメージからは見えてこなかった「有島武郎の思想とその系譜」を描き出すこと、それが本博士論文における要諦である。